
1Room

千ノ葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 ROOM

【Nコード】

N4503V

【作者名】

千ノ葉

【あらすじ】

今年大学に合格したばかりの藤森 ふじもり 晃 あきらは新生活に期待をを膨らませていた。

彼が住むことになったどこにでもある1ROOMアパート。

そこで彼は恐怖の体験をすることになるのだが……………

XX目

暗闇。それはどこにでもあるモノ。

昔から忌み嫌われていたのに在り続けているモノ。

それは家の中でも例外ではない。

テクノロジーが発展した現代でもそれは一緒である。

電気を消せば　　ほら、そこにあるのだ……………真つ暗な暗闇
が……………

暗闇には魔物が住んでいるという。

だが、僕は逃げずにここに居る。

事の始まりは些細なことからである。

僕の置かれた状況を説明するには、まずはそのことから話をしなければいけないだろう。

1 日目

僕の名前は藤森^{ふじもり} 晃^{あきら}、この春から大学生となり、都内某所のアパートで晴れて一人暮らしを始めた。

部屋の間取りはアパートの一階の隅のワンルーム。ユニットバス、キッチン付き。6畳と広さはお世辞でも広いとは言えない。1・5畳分のロフトがあるのがせめてもの救いだらう。

しかし、3万6千円という破格な値段に魅かれ、僕と両親はここを選んだのであった。

すぐに引越しが開始され、僕の私物はここへと運ばれた。実家の部屋とはほとんど変わらないところに冷蔵庫やレンジ、テレビといった現代の生活必需品が運び込まれてくるのだ。そりゃ部屋は狭くなる。

お金持ちのボンボンから見れば、ここは豚小屋のように見えるのかもしれない。

それでも引越しが終わるころには、私物が運ばれてきて部屋も僕色に変っていた。

「じゃあね。元気でやれよ」

そう言つて両親は笑顔で扉を閉める。その瞬間に何とも言えない解放感が込み上げてきた。

この瞬間から念願の一人暮らしが始まったのだ。

その日の夜は引越しの疲れなどもあり、早めに就寝するのであった。

今思えばこの日の夜が最後の平穏であった気がする。

2日目

次の日は至って普通の日。

けたたましいアラームの音もうるさい親の声も無く、いつまでも寝ていられる。

”規則正しい生活”がモットーの家では考えられないことだとは言っても、昨日寝た時間が早かったせいか起きた時間は6時半、太陽もまだ寝起きのように頼りない光でカーテンの隙間から僕の部屋を照らしだしていた。

もう少し、寝ていたいところだが、重たい身体を起こし、すぐ傍の簡易キッチンまで歩み寄る。

喉が渴いていたので水で喉を潤そうとしたからだ。だが、コップが見つからない。昨日のうちにやっておけばよかったと少し後悔だ。

まあ、そのことを今言っても仕方がない。僕は蛇口を覗き込むようにして口を開ける。

キュツ、キュツ

蛇口を捻る音とともに、冷たいモノが僕の口の中に侵入してくる。

だが、その味は明らかに”おかしい”。

田舎育ちの僕でも都会の水が不味いことは知っている。

その理由としては浄化段階で大量の塩素などを投入するからだ。

だが、僕が”おかしい”と思ったのはそんな理由からではない。

瞬時に吐き出した水の色は赤、そして口の中には鉄の味が広がる……

流れ続けている水の色も赤……流れの悪いシンクの中にはその水が溜まっている。

「うわっ……錆水だ……」

思わず声を上げてしまう。田舎の水道ならともかく、いくらボロ物件だとしても都会でこんな錆水を味わうとは思わなかった。

しばらく水道を出しているとその色は赤から透明に変わった。

それを見て僕は安心する。この不味い水を飲料、料理それにお風呂で使わなくて済むのだから。

錆水を飲んでしまっていることが一つあった。目がパチリと覚めたことだ。まさに怪我の功名。

そのまま顔を洗い朝ごはんの準備をする。ご飯は定番のカップラーメンだ。

食糧が未だ揃っていないこの状況下、栄養面には目を瞑ろう。

それからダラダラと段ボールを開け、生活必需品を揃える。昨日の内に大方やっていたので大した労力ではない。

とはいってもダリイ作業ではあるのですべての段ボールを潰し終えたころにはもうお昼の時間である。

それから買い物などでその日は潰れた。

二日目の夜、僕は炊くことを失敗した堅いご飯とスーパーで買ってきたお惣菜を食べていた。

その味気ない食事ですでにホームシックである。

夜の時間はひたすら長い。

いくらチャンネル数の多い関東圏のテレビといえど、この暇さを消し去ることはできないようだ。

荷物が多くなるのを恐れ、ゲーム機の類を実家に置いてきたことは失敗だったらしい。

仕方がないので、シャワーを浴びてさっさと寝ることにした。

ロフトに上がり目を閉じる。昨日よりかは疲れていないのでどうしても寝付けない。だが動くのも気だるい。ひたすら目を閉じ、眠りの園へ誘われるのを待つ

ザー……

どこからか小さな音が聞こえてくる。僕は自然とその音に耳を傾けた。

その音はテレビの砂嵐の音のようで途切れることなく僕の耳に入ってくる。

この部屋からではない。先ほどテレビの電源は切ったのだから。

おそらくは、右の部屋　僕の部屋が105号室なので103号室からだろう。

104号室ではないのかという疑問が帰ってきてそうだが、このアパートには4の付く部屋が存在しない。

元来日本では4という数字が忌み嫌われている。4は死という字を連想させるからだ。

それを配慮したオーナーが部屋番を1つずらしたらしい。

ザー……

その音は鳴り止まない。しかたがないので僕は音楽プレイヤーを耳に押し付け、その音をやり過ごした。

3日目

朝の目覚めは悪い。

実家ではベッドに寝たので布団と固いフローリングの組み合わせは中々身体に馴染まないらしい。

背伸びをし、倦怠感を逃がそうとするが、無理らしい。

それでも今日は始まる。

昨日までで大抵のことはしてしまったので今日はやることがない。朝のゆっくりとした時間を過ごすのだ。

ご飯の炊きあがりを待っていると、壁越しに物音が聞こえてきた。それは扉を開ける音だ。

昔は引越などをしたらご近所に挨拶するのが普通だったらしいが、今の風潮ではあまりそういうことをしないのが一般的だ。

だから、自分の隣にどんな住人が住んでいるのかも知らなかった。この時間に出かけるのだから、おおよそサラリーマンであると予想をし、僕は気にも留めずに、テレビのニュースに耳を傾ける。

それから数分後。何か背筋にゾクつとしたモノを感じた。

何か、気になる。不可思議な感覚だ。

後ろを振り向けば、そこには玄関がある。

隙間風　　は吹いているが、春先のこの時期では室温も外温もほとんど変わらないはずだ。

鳥肌を立たせるのは何か違う

違和感を辿り、扉の前に立つ。

目に飛び込むのは何製だか分からないが、少なくとも固い扉。外部と内部を繋げる入口だ。

この扉を閉めてしまえば、僕の部屋が完成するはずである。だが、その部屋も、先ほどまでの安心感を失っていた。

気のせいであることを確信するために、僕はノブに手を伸ばす。だが、扉は拒むように、ガチャンと音を立てて、動かなかった。驚いて上を見上げると、ドアにはシリンダー錠とチエーンロックが掛っている。

それはそうだ。昨日の夜から外には一步も出ていないのだから。チエーンを外そうと、ドア上部に手を伸ばしたとき、外部視野にふと、穴が映った。

それは俗に言う覗き穴というもので、防犯をするために訪問者を見れるものだ。

僕はその穴に右目を付け、玄関先を見る。

視野が狭いのはつきりはしないが、そこに誰かが居ることは簡単に分かった。

それもそうだ。彼女はずっと僕のほうを見ていたのだから……………

声が出そうになり、僕は口を押さえた。

ここで声を出したら、彼女が入ってきてそうで怖かったから。

一歩一歩下がり、僕はロフトへと上がる。もちろん音がしないように。

そこでやっと止めていた呼吸を再開する。

「はあはあはあ……………」

部屋の中に響くのは僕の息と冷蔵庫の稼働音だけ。

うるさいと思っていた電化製品の音だが、この時だけはありがたい。この音がなければ、僕の息が外へと漏れそうだと思うたから。

「なんなんだよ……………」

僕は呟き考える。

彼女はどうみても不審者だ。ここは110番
いや、引越して早々警察のお世話になるのはどうも気が引ける。

「そうだ。もしかしたら部屋を間違ったのかもしれない……………」

プレートが違うだけでこのアパートは同じ扉が連なっている。

僕も入る部屋を何回も間違えそうになっているのだから、彼女が間違えてもおかしくない。

僕を見つめていたと思ったのも気のせいかもしれない。

何せ、驚いた反動で、その場から逃げ帰ってしまったのだから。

覗いていたのはたった数秒だし、偶然彼女が扉を見ていたのかもしれないのだから。

そう思うと、肩の力抜けた。

そして苦笑が漏れる。

いくら慣れていない生活だからと、訪問者一人にここまで怯えるなんて……………」

「どうかしてる……………」

そう呟くが、心には何かが引っ掛かっていた。

「いや、なんでもないさ」

息を深く吸い、深く吐く。

そして意を決し、ロフトから下のフロアへと降りる。

僕が真っ先にした行動はドアの傍に行き、覗き穴から外を見ることだ。

「やっぱり何も居ないじゃないか」

そこから見えたのは何の変哲のないアパートの入口。

見たことあるような赤いアスファルトがあるだけであった。

バタンツ

急な音に僕は身体を震わせる。

いや、何を怖がっているのか。これは隣の住人が扉を閉めただけだ。ここで目を離しても良かったのだが、興味本位で僕は覗き穴を見続ける。

もしかして、先ほどの女性は隣に住む人なのかもしれないのだから。右側から現れたのは男性。スーツを着ているのでサラリーマンであるのがわかる。

彼は僕の部屋の前で止まることなく、コツコツと足音を響かせ去って行った。

「ぶつっ」

先ほどの女性が隣の住人であったらと想像し、ゾツとした。

それが僕の想像の範囲で良かったと、安堵のため息すら出してしまう。

「何を過剰反応しているのだから……」

一人暮らしをして三日目。そろそろ生活にも慣れないといけないというのに、
自分の臆病さに心底呆れてしまった。
結局この日は特に何もせず、時間だけが過ぎて行ってしまった。

昼間の時間はあっという間に過ぎて行ったというのに、
夜は長い。僕は特にやることもなく、いつものようにテレビを見ていた。

バラエティが終わり、つまらないドラマが始まる。

番組に見切りをつけて、僕はお風呂に入ることにした。
お風呂といってもユニットバスなのでシャワーを浴びるだけになるのだが……

まあ安い家賃なので文句は言えない。

衣服を脱ぎ、シャワーカーテンを引き、バスタブに足を踏み入れる。
シャワーを持つと、2つの蛇口を捻る。

お湯と水の水量を調節しながら温度を作り出すのは面倒だ。
だが慣れてしまえば大したことはない。
すぐにお湯はいい具合の湯加減になる。

僕はそのお湯を身体にかける。

極楽の時間だ。

だが、そんな時間も長くは続かなかった。
急に目の前がブラックアウトしたのだ。

停電だ

「なっ！」

電球が急に切れるはずはない。

ブレーカーが落ちたのか、地区的に停電したのか。

いや、原因などどうでもよい。

今の状況を打開するのが先だ。

とりあえず、お風呂を上がって

そう思い、蛇口に手を伸ばした瞬間であった。

「ぎゃああっ！」

叫び声。それは自分のものだ。

僕に声を上げさせたのは、先ほどまでよい湯加減であったシャワーの温度であった。

背中に痛みを感じるほどの熱さを感じ、僕は必死に水の蛇口を捻った。

今度は冷たい冷水が背中へと降りかかる。

心臓麻痺しそうな温度差にまた悲鳴が上がる。

「くそお……」

誰に不平を言うわけでもないがそんな声が上がってしまふ。

風呂から這い出たとき、窓の外の風景が明るいき事に気がついた。どうやら地域的な停電では無かったらしい。

手探りで僕は懐中電灯を探し、玄関上のブレーカーを確かめる。

引越し前に上げていたはずのレバーは見事に下がっていた。
僕がレバーを上げると、部屋の中に明かりが灯る。

「何だっただよ……」

大した電力も使っていないというのにブレーカーが落ちるなんて、
もしかして僕はとんでもない物件に住まわされてしまったのかもし
れない……………

「はぁ……………」

ため息をつき、まだヒリヒリとする背中を撫でた。

不幸を忘れるために僕はすぐに床についた。
ひんやりした布団は背中を冷やすために丁度良い。
これならすぐにでも眠れる

ザー……………

また、聞こえる。

壁の向こう側から。

ザー……………

眠りを妨げる騒音が耳に届く。

それも途切れずに永遠と

昨日よりも音が大きいのは気のせいではないだろう。

昼間にはこんな音はしない。

ということは誰かが夜間だけテレビを点けっ放しにしていることに

なる。

何のために？

省エネ時代であるまじき行為　いや、それ以上に付近の住民に迷惑だ。

位置からすれば僕の入り口に向かって右の部屋。

つまり103号室の部屋からだ。

この音量では102号室の住人にも同様の音が聞こえているに違いない。

住人は苦情を言いに来ないのだろうか？

それとも僕が言いにいくべきか？

頭の中をいろいろな考えが過ぎる。

だが、未知の住人に苦情を言いにいく勇氣などなく、僕はひたすら音に耐えるのであった。

4日目

僕は目を覚ました。昨日以上に体がだるい。

風呂場で鏡を覗くと、目の下には黒ずんだ窪みができていた。

ここまでクマができるのは受験シーズンで徹夜で勉強をした以来であった。

水で顔を洗い、気分だけはしっかりとしておこうとする。

昨日はどこにも行かないで過ごしてしまったが今日はすることがある。

主に食料の買い込みだ。

スーパーはまだ開いていないが、それに向けて準備を始める。

まずは洗濯だ。

部屋が狭いので洗濯機の置き場は自然と外になる。

僕は溜まった衣服を抱えると外に出る。

玄関の脇には新品同様の洗濯機が置いてあり、僕はそこに衣服を投げ入れ

洗剤を投入すると、スイッチを押した。

試運転した時と同じように、機械は音を立てて衣服を乱雑に洗っていた。

文明の利器というのは便利だ。しかし、

その便利ゆえにやることのない僕は暇になってしまう。

小腹がすいたので食事を食べるか、それとも溜まった食器でも洗うか。

まあ、時間もあるしどちらもやろう。

ノロノロと家事をこなしていると、突然、外から電子音が鳴り響く。ああ、もう洗濯が終わったらしい。

僕はまた外に出て洗濯機から湿った洗濯ものを両手で抱えるのだ。

欲張り過ぎて靴下を地面に落してしまった。

ああ、せっかく洗濯したばかりだというのに

砂粒で汚れてしまった靴下を拾い上げるために僕は屈む。

ボタン

急に背後から音がした。

すぐに扉の閉まる音であることが分かった。

不用意に扉を押してしまったのだろうか？

まあ、オートロックではないので僕はさらなる落下物が出ないように、

慎重に靴下を拾った。

「ほっ……………」

不意に出る声は無理な体勢でノブに手を伸ばしたためだ。
どうにかノブを掴み、右側に回す。

ガチャリ

開くはずの扉が一瞬、何かに引っかかった。

僕はもう一度、ノブを回す。

ガチャリ

また、扉は開かない。

「えっ？　なんでだよ……………」

僕はここで初めて焦りを覚えた。

洗濯物を洗濯機の上に置き、ノブを回す。今度はしつかりとだ。しかし、ノブは僕を招き入れるつもりはないらしい。

先ほども述べたように、家はオートロックではない。扉に掛かるのはシリンダー錠のみだ。

扉を閉めるだけでは鍵はかからない　はずだ。

しかし、ここで少し昔のことを思い出す。

シリンダー錠やかんぬき式のカギは外からでも閉められることを僕は知っているのだ。

小学校の頃、推理アニメが流行り、密室ゴッコという遊びをしたことがあった。

遊びの内容は至って簡単だ。

トイレなど簡単な鍵が掛かる所に行き、鍵を半分ほど掛けて、外に出て思いつきり扉を閉める。

そうすれば、扉の衝撃により鍵が閉まり、あたかも中に誰かがいる状態を作り出すことができたのだ。

このテクニクを使い、僕らは色々な密室を作って楽しんでいたっけ……………

「なるほど……………」

この状況を打開する手段を考える。
とりあえず、最初に思いついたのはドアの隙間から本当に鍵が掛かっているか覗いてみる。
残念ながら扉との隙間がほとんど無いためにここからじゃ判断できないようだ。
仕方が無いので僕は建物をぐるっと一周し、ベランダ側に回る。
そこには同じような形のガラス戸が並んでいる。
部屋番を数えながら僕は4番目の扉の前に来る。

「よつと……………」

簡単な柵を乗り越え、僕は部屋の扉を覗く。
扉は曇りガラスになっていたので中はよく分らない。
だが、そんな扉の上部だけは普通の硝子のように透明になっていることを思い出す。

柵に足を掛けて中の様子を覗く。
生憎目は悪くないので鍵の様子は

「見えない……………」

そう、見えなかった。さすがに遠いものである。
仕方が無いので僕は柵から降り、また玄関の方へと回ろうとする。
その時、視野の端っこになにかが映った。
曇りガラスの向こうで何かが動いた気がしたのだ。

僕はギョツとして、ガラス越しに部屋を覗く。黒い影は部屋の中にある。

動いてはいないが不気味に部屋の壁際に佇んでいた。
確認するのは怖い、確認しないでおくのはもっと怖い。
意を決して、僕は柵に足を掛け、中を覗き込んだ。

「馬鹿みたいだ……………」

部屋の中の黒い影は冷蔵庫だった。
自分の度胸の無さに嫌気がさす。

僕は柵を降り、玄関の方へと回ろうと来た道を戻った。

その時気がついたのだが、冷蔵庫の位置は僕の移動方向と逆だ。そこにある影は完全に死角になるはず……………」

とは言っても些細な事だったので特に気にせず、僕は玄関を開ける方法を考えるのであった。

玄関の前に戻った僕は最後の望みを込め、再びドアノブを握った。

ガチャン

何と扉は開いてしまった。先ほどには絶対に開かなかった扉が

洗濯機に置いたままの洗濯かごを抱え、僕は部屋に入る。

誰かが中において、鍵を開閉したという可能性は捨てきれなかったのだ。お風呂場、ロフトを入念に調べた。しかし、そこには誰かいた形跡も荒らされた跡もなかった。

だから、僕は鍵が閉まっていたのは自分の気のせいであると自己完結をせざるを得なかった。

そう考えるのが一番不気味ではなく、腑に落ちるのだから。

その日は気持ち悪くなり、外で過ごした。遠出するにもお金は節約しかかったので、家からそう離れていない駅前で時間を潰した。都

会では無名な駅の駅前でも、田舎以上に遊びはあるので十分に時間を潰すことはできた。

夕飯を食べ、帰宅する頃にはもう、携帯電話のディスプレイは19:00の文字を示していた。

僕が玄関の鍵を開けていると、足音が近づいてきた。

驚いて音の方を振り向くと、そこには作業着を着た男の人がいた。年齢は20代後半というところだろう。金髪だったので少し警戒したが、よく見れば顔は温和そうだった。

彼は僕に会釈をしたので、僕も軽く会釈をする。

「新しく来た人かい？」

「あつ、はい」

「悪いんだけど、夜はテレビ切ってくれよな」

「えっ……ああ、ごめんなさい」

反射的に僕は頭を下げってしまった。

彼は僕の右の部屋の鍵を開け、部屋に消えていった。

引越し早々怒られて、へこんだ僕。しかし、その頭には引っかかりを感じてならなかった。

僕はたしかに深夜番組を見ていた。しかし、音量はそんなに大きかったであろうか？

シャワーの音や家電の音すら気にする僕が、テレビの音量だけ大きかったなんて信じられない。

それとも隣の住人が神経質なだけなのか。僕には判断できなかった。

ふと、頭に嫌な考えが浮かんだ。僕も彼と同じことを思っていたと。僕はあのお兄さんがテレビを点けっ放しにしていると思っていた。

しかし、自分の事を棚に置き他人に文句を言うことなどあり得るだ

ろうか？

都会は変な人が多いと聞くし、可能性はあるが

もしかして、同じ音が聞こえている

いや、そんな訳はない。僕たちの部屋の間にはどんなものもないのだから

その夜もテレビのノイズはボクの眠りを妨げる。

右隣の部屋からは時折、ドンっ　という壁を叩く音がする。

おそらく、隣の住人からの抗議なのだろう。しかし、ボクはテレビなど点けてはいない

ならば彼は何に抗議をしているのだろうか？

ボクは布団を頭まで被り、長い夜を過ごした。

5 日目

気が付けば朝になっていた。

昨日はあまりうまく眠ることが出来なかった。そのせいで身体はダ
ルい。

水道を捻ると、また赤い水が出た。驚きはしないが、数十秒水道が
使えないのは面倒である。

今日の予定は市役所に行くことになっている。少々面倒だが住所を
移さなければならぬ。

携帯電話を使つて、あらかじめ役所の場所を探してある。電車で2
駅と少々遠いが、市自体が大きいので仕方が無い。

それに住所登録さえしてしまえば、市役所などに用は無くなる。
気合を入れてボクは外出の支度をした。

家を出ると、途端に隣の部屋の扉が開いた。

私服の金髪のお兄さんが出てきたと思つたら、彼はボクの顔を見る
や睨みを利かせてきた。

「ボクではない」と弁明をしたかったのだが、彼がすぐに立ち去つ
てしまったので、機会を逃した。

それに言った所で信じてもらえないかもしれないし。

彼が乗るバイクの音が遠くなったところで、ボクも移動を開始する。

その日は散々だった。電車を乗り間違えるわ、市役所の道を間違え
るわで時間を食ってしまった。

予定を狂わされたて自棄になったボクはまたお金を浪費し、時間を
無駄にしてしまった。

高校時代までのお小遣いやお年玉の蓄えがあるといつても、このペ

ースお金を使っていれば、一文無しはすぐそこだ。これからは食費や電気代もケチらなければという訳で、今日の晩飯はスーパーで買って来た。とは言っても中身はカップラーメンなのだが……………

袋を提げ、帰路についた。かさばる荷物は少々邪魔だが、あの曲がり角を曲がればすぐに家だ。ほら見えてきた。

だが、僕は右手に持っていた袋を落としそうになる。

ボクのアパートには誰か立ってる。誰か立っている事自体は問題無いのだが、その立ち位置が問題なのだ。

その人は入り口から4番目、つまり僕の部屋の前に立っているのだ。

百メートルの距離があるので彼女の特徴は詳しくは分からない。

しかし、それがこの前、扉から僕の部屋を覗きこんでいた人物に思えて仕方がないのだ。

長い髪に赤いブラウス 服装は普通なのだが、どこか気味が悪い。僕は進む事も戻ることもできずにその場に立ち尽くすことしかできなかった。

彼女は動かない。僕の部屋の扉の前から一步も動かないのだ。

彼女の目線の先には、覗き穴があるのかもしれない。もしかしたら、あの時もずっと部屋の中を覗いていたのかもしれない。

ストーカーか変質者かは分からない。しかし、こういう場合は警察に連絡をしたほうがいいのだろうか？

反射的にポケットに手が伸びた。そこには携帯電話があるから。手を突っ込み、固い感覚を感じた途端、急に指に振動が走った。

「うあわっ」

不意な着信に、買い物袋を落としてしまった。当然、道端には買った食材がぶちまけられる。

僕は慌ててしゃがみ、それらを袋に戻しながらディスプレイを確認した。

0 X 0 - X X X X - X X X X

そこには携帯電話の番号が表示されていた。名前が出ないという事はアドレス帳に登録していない人からだ。

もしかして、市役所に書いた書類にミスでもあったのかもしれない。住民登録で電話の欄に自分の番号を書いたから。

とりあえず、通話のボタンを押した。同時にモノを拾い終わり、正面を見た。

アパートの扉の前には女性の影形は無くなっていた。

「もしもし」

彼女はどこにいったのだろうか？

「……………」

目を離したのは十秒ほどだ。その間に消えるなんて

「もしもし？」

まるで、彼女はあのアパートの住人みたいに思えた。

「ザー……………」

「えっ？」

受話器から人の声はしない。しかし、聞き覚えのある音が聞こえてくるのだ。

毎晩聞いている、あの音が

「もしもし！ なんですか？」

不気味さ以上に苛立ちが先に込み上がり、僕は受話器に向かって憤慨する。

「ザー……………」

しかし、受話器からは同じ音が聞こえるばかりだ。

「悪戯ですかっ！ 誰だよ、出てこいっ！」

僕は叫んだ。計算があつたわけではない。思い付きだ。こんな声を張り上げたのは小学生以来だ。

途端、音は止んだ。僕は自分の声色が相手をビビらせたかと勝ち誇った。

だが、そんなことは勘違いでしかなかったのだ。

「じゃあ、いくね」

頭に昇った血が一気に下がり、全身が冷たくなるのを感じた。

受話器越しに初めて聞いた相手の声は女性のものだ。だが何かがおかしい。

田舎者の僕からしてもイントネーションがおかしく、生気が全く感じられない声なのだ。

それに内容 「行くね」

「行く」という事は僕の所に「来る」ということなのだろう。

偶然か分からないが急に風が冷たくなった。いつの間にか太陽も完全に沈んでいる。

いや、そんな訳は無い。ただの悪戯。ただの偶然。

僕は自分にそう言い聞かせて、アパートに近づいた。

部屋に入った途端女がいたら怖いので、まずはベランダ側に回り、部屋の中を確認した。

こんな時間に、こんな覗きのようなことをしている人間がいれば、真っ先に通報されそうだが、こうでもしなければ部屋に入れる気がしなかった。

部屋の中には誰もいない。ロフトとユニットバスの中は確認できないのだが、少々安心した。

部屋の扉まで来た。ノブを回しても開く気配は無い。それは鍵が閉まっているのだから当然だ。

僕は自分の持つている鍵を差しこみ扉を開けた。

扉は簡単に開いた。

だが、不意に背中から冷たいものを感じた。

それはおそらく視線。

全身から冷や汗が出るのを感じる。

ここで僕は理解した。あの赤いブラウスの女性はおそらく「この世のモノ」ではないということ。

そして彼女が僕のすぐ後ろに立っているという事を。

僕は靈感など無いし、幽霊など見たこともないというのに 動物

的感は何れない。

こつも簡単に異形の物を感じ取ってしまうのだから。

身体のすべてが僕に教えてくれている。振り向いたらヤバいと

頭の中は冷静なのに、身体は氷のように固く、冷たい。

このまま部屋の中に飛び込みたいというのに、キーを差した手は動いてくれない。

金縛りにあつたまま、僕はその場でひたすら耐えた。

根負けすれば、僕はかならず振り向いてしまう。

そうなれば、何が起こってもおかしくはない。

ひたすら念仏を頭の中で繰り返す。もちろん念仏など、ばあちゃん
の葬式でしか聞いたこと無いので、殆ど適当だ。しかし、そうでも
しないと心が折れそうであった。

数分の格闘は突然終わりを告げた。

遠くから駆動音が聞こえ、その音が近づくとたびに身体が暖かくなる
のを感じた。

いつもはうるさいバイクの音が今日だけは、賛美歌に聞こえた。

バイクはアパートの前に止まった。それと同時に僕を縛る異常な空
気は消え失せた。

緊張の糸の切れた身体は地面へと崩れ落ちてしまった。腕から足に
かけて、疲労感が一気に込み上げた。

「おい、大丈夫か？」

金髪のお兄さんは僕のことを心配し、駆け寄ってきてくれた。

「ええ……大丈夫です」

自分の足で立ち上がろうとしたが、足はガクガクと震え、身体は起
き上がらない。

まるで生まれたての小鹿だ。

「おいおい。救急車呼ぶか？」

「い、いえ……寝ていれば治るんで」

大事にしたくはなかったので、僕は彼の言葉を断る。

何とか壁に手をついて立ちあがったが、手が震え、ノブが握れない。

「ったく……ほら」

お兄さんは面倒くさそうに舌打ちし、僕の身体に手を回した。

結局、僕は彼に支えられながら、部屋に入った。

フローリングに座ると、少し気分も落ち着いてきて、悪寒も引いてきた。

冷静になればなるほど、自分が自力で数メートル歩けなかったことを恥ずかしく思う。

「落ち着いたか？」

「はい……ありがとうございました」

彼に頭を下げる。

「じゃあ、平気そうだから、俺は行くわ」

「待って！」

自分でも意識していないというのに彼を引き止めてしまった。

「何？」

「あ えっと……」

僕は言葉を探した。自分でもこの状況を理解していない。

だが、彼を引き止めないと、一人になりたくないと思ったのだ。

「あの、隣に住んでいて、何か変わった事ってないですか？」

「変わったこと？」

「怪しい人が覗いてくるとか、変な電話がかかってくるとか」
「いや、無いけど」
「なら、いいんです……」

やはりあの女性は僕だけを狙っているのだろうか。
ならば、何故、僕だけを狙っているのだろうか？
こんなこと田舎にいた時は無かったし。ここに住んでからだ。

「あの、ここに以前、人って入ってました？」

「この部屋か？ ああ、1年前くらいに住んでいたな。すぐに出て
つちまつたけど」

「えっと、その人、何か変なこと言っていましたか？」

「いや……面識はほとんどなかったからな」

「そうですか……」

「そういや、そいつも深夜までテレビを点けっぱなしにしていたな。
お前も勘弁してくれよ」

「はあ……ごめんなさい」

「じゃあ、俺は行くから。見たいテレビがあるんだ」

お兄さんはそう言って玄関を出る。

僕と見たいテレビを天秤にかけて、テレビに軍配が上がったのは悔
しかったが、彼を留めておく理由は無かったので、僕は頭を下げ、
彼を見送った。

とりあえず、戸締りをし、布団を被った。

電気は消していない。暗闇に乗じて、先ほどの女性が現れるのが怖
かったからだ。

寝るのには少々早かったので思考を巡らせる。

テレビの音。

赤いブラウスの女性。

悪戯電話。

自分の感じた背中への気配

これは何を示しているのだろうか？

それにお兄さんが言っていた、前に住んでいた住人。

すべてを点で繋げた時、何が見えてくるのだろうか？

僕は怖いと思いつつも首を突っ込もうとしている。

そうしなければいけない気がするのだ

そうだ。明日はここについて調べよう。そうすれば何か分かると思うから。

気が付けばもう23時を過ぎている。少しは寝ないと明日の為に。僕は目を瞑った。

ザー……

やはり今日もテレビのノイズが聞こえるのだ。

6 日目

朝の目覚めはやはり悪い。昨日以上に身体がダルい。

一日ボーっとしてここに家でゴロゴロしたいという衝動に駆られたが、今日の予定を先延ばしするわけにはいかない。僕は身体を起こし、朝一番のシャワーを浴びる。

簡単な食事をし、9時に家を出た。目的地はアパートの管理会社だ。もちろん怪奇現象が起こると言いに行く訳ではない。そんなことを言っても門前払いだろうから。

電車の中で何を言うか頭の中にまとめ、僕は2駅分の移動をした。

管理会社は駅前にあった。以前両親と尋ねたことがあったので、入るのに躊躇はしなかった。フロントで僕は旨を伝える。

アポイントメントを取っていなかったことで、受付所のお姉さんは少し嫌な顔をしてきたが、そんなことは気にしない。彼らからすれば僕はお客様なのだから。

すぐに僕は奥の部屋へと案内され、ソファーへとかけるように言われた。

机の向かいにいる中年の男性のことは知っている。契約の時の名刺には確か、高橋と書いてあった。

ビンゴ。彼のネームプレートには「高橋 洋介」という印字がしてある。

「で、アパートで水道の調子が悪いとおっしゃってましたね」

「ええ、契約時に確認した時には何とも無かったんですけどね。直

「せませんか？」

「はあ……しかし」

「それにドアの鍵が掛けていないのに閉まってしまったこともあり
ましたよ」

彼は「すみません」と平謝りをし、すぐに修理の者を派遣すると言
ってきた。

対応は丁寧だが、その顔には「面倒臭い」という文字が書かれてい
た。

「あの、ちょっとお聞きしたいんですけど」

「なんででしょうか？」

「105号室の前に住んでいた人が、すぐに出て行ってしまったと
いう話を聞いたんですけど、あそこって何か問題でもあるんですか
？」

核心に迫る質問であった。

「すみません。あの物件が当社の管理下になったのは今年の事だっ
たんですよ。だから知りかねますね」

しかし、戻ってきた答えはあまりにも僕の期待外れの事だった。

「でも 何か知っていませんか？ 例えば事件があったとか」

「 そんなことは聞いておりません」

いくら聞いても彼は知らないということの一点張りだ。

本当に知らないのか、知っていて嘘をついているのかは判断できな
い。

だが、こうまで言わないのだから、何をしても聞き出せないのだろ

う。

とりあえず、水道やドアは直してもらえらしいので、僕は会社を後にすることにした。

結局、電車に乗って遙々来たというのに収穫はゼロ。途方に暮れて、駅に向かっていている途中、僕の目にはある建物が飛び込んできた。

市立図書館 なるほど。

ここならば、事件があつたならば調べられるはずだ。

迷う理由はない。僕は図書館へと歩んだ。

思った通り、図書館では過去の新聞記事をスクラップとして取っている。

問題は情報の山からどうやって、事件を調べるかだ。

僕の知っているキーワードは少ない。ただページを捲っているだけでは、見つけるのは無理だ。

だが、僕は現代っ子。困った時の常とう手段を知っているのだ。

PCコーナーでパソコンの電源を入れ、インターネットに接続する。もちろん検索サイトにアクセスをする。キーワードは

「XXXXアパート 事件」

最初から引つかかることを期待はしていなかったが、やはり目ぼしい情報は無い。

なんども検索ワードを変えてもヒットしない。

焦りを覚えてきた頃、あることが思い出された。

たしか管理の会社の名前が変わったと。ならばアパートの名前が変

わっていてもおかしくない。

僕は携帯電話を取り出し、メモ帳に記録をしておいた自分のアパートの住所を打ち込んだ。

「ハイツ×××」

ビンゴ。同じ住所で違う名前の物件を発見した。

ホームページのタイトルは「不動産」

先ほど訪ねた会社とは違う。おそらく前の管理会社のことだろう。

ページの更新は去年で止まっている。おそらく会社自体は潰れてもホームページを消し忘れたのだろう。

だが、お陰で助かった。アパートの名前を得る事が出来たのだから。

「ハイツ××× 事件」

ワードを入れて検索をしたところ、思ったよりも簡単にヒットした。

「春野^{はるの} 瑛子^{えいこ}さん、行方不明」

僕が思った通り、あのアパートの住人が事件に巻き込まれていたのだ。

記事の内容は以下の通りだ。

1987年、3月27日未明。都内に都内に住む、春野 瑛子さん（18）と連絡が取れないと両親が警察に通報した。同日、警察はアパートをくまなく搜索したが、部屋には金品が荒らされた形跡はなく、彼女の行方に繋がる手掛かりは見つからなかったという。

春野さんは同年、大学に合格したばかりで、周りに親しい友人

や知り合いはいなかったらしい。

警察は近隣の人に聞き込みを行うなど、彼女の行方について追っている。

失踪事件など良くある話

いつもはそんなことを思っていた。

しかし、自分の住んでいる場所が事件の舞台になっていると考えるとゾツとした。

春に引っ越したばかりの女の子が急に居なくなるだろうか？

事故？ 自殺？ いや、殺人

僕は幽霊なんていないと考えている。昨日感じた感覚も嘘だと信じたい。

しかし、いるとすれば、それは自分の執着する場所に留まるのではないだろうか？

そして彼女が今いる場所は

いや、警察が調べたのだから殺人の可能性なんて

とにかく、僕はとんでもない所に住んでいる。それだけは理解できた。

結局、その日はそれ以上の情報は知ることが出来なかった。

家に帰ったのは昼過ぎだ。本当は帰りたくなかったが、最近の外出で出費はかさんでいる。

ここは堪えなければ。

それに調べたい事があった。

僕は部屋の中を見渡し、怪しいと思うところをすべて調べた。

何も無い。

当たり前だ。事件は24年も前に起こっている。その間に何人もここに住んだだろうし、記録によれば改築もされている。何かあれば分かるはずだ。

しかし、こうでもしなければ、冷静な思考を保つ事が出来なかった。

夜まで部屋の中を調べたが何も成果は出なかった。ただ身体が疲れただけ。

今日は早めにシャワーにしよう。そう思った。

だが、バスタブを見て、考えは変わる。ここに来てから一度もお湯を張った事は無かった。だからお風呂に浸かりたいと思ったのだ。

詮をし、湯を溜める。お湯が外に出てはまずいので、量は6割程度だ。

大した時間もかからずにお湯はバスタブを埋め尽くした。狭いと言えど、久しぶりのお風呂に何だかワクワクする。

お湯に浸かることで疲れは癒された。今日の汗も心配事も流れて行く

ウトウトとした。昨日はあまり上手く寝付けなかったから。

気が付けば、バスの中は暗くなっていた。

寝てしまい、何時の間にか日が落ちてしまったらしい。

電気は外にある。すぐにはつけられない。

僕は湯船から立ち上がる。しかし、何となく身体に違和感があった。

足がやけに重い。湯に浸かっている腕もだ。唯一お湯から出ていた右腕を湯に突っ込む。

又チャリ

気味の悪い感触が指先から脳へと上がってくる。まるで藻の群れにでも手を突っ込んでいる感覚だ。

この時から悪い予感はしていた。しかし、やるしかなかった。右手で思いつきり物体を掴み、一気に引き抜いた。

ブチブチと鈍い音がし、物質はちぎれた。

「うわあああああつ！」

手についたもの、それは髪の毛だった。無数の毛がお湯を黒く染めている。

なんでこんなものがっ！

半狂しながら、僕は手足に絡みつく髪の毛を引き千切った。何度も何度も

身体が自由になったところでお湯を出て、バスの電気を点けた。

だが、そこには何も無かった。ただ湯船に張られたお湯があるだけ。しかし、その湯の色はほんのりと赤い。

「つつ……」

痛みが走った　　辿れば掌からだ。

見れば右手が赤い。掌を横断するように赤い線が付いている。血だ。湯船を染めたのは僕の血だった。

傷口を確認すると痛みが増したようだった。血が滲み出るたびに、ズキズキとした鈍い痛みを感じる。

僕は慌てて部屋に戻り、止血を試みる。包帯も何もなかったので、食器拭きに使っていたタオルで手を縛った。

傷自体は深くないらしいが、どうも血が止まらない。タオルをきつく縛り、自分の心臓よりもあげる。

これではらくすれば血が止まるはずだ。

床に座り、僕はバクバクと音を立てて鳴る心臓を抑える。

「大丈夫。あれは夢だ」

いくら呟いても、身体で感じた感触を忘れることはできない。今でも身体全体にねっとり絡みつく髪の毛の感触を忘れる事はできないのだ。

あれが夢幻だとしたら、なぜ、僕はそんなものを見る。

髪の毛。あの長さならば女性。髪の毛の長さは背中程だろうか。

僕の頭には部屋の外にいた赤いブラウスの女性のことが浮かんだ。遠目だったが、彼女の髪の毛の長さは長かったと思う。

という事は、彼女が春野 瑛子。

そして、彼女は

「ここに居るのか……春野 瑛子さん」

呟いた。

呟いた言葉は波紋のように僕の心の中を確信の色で染めていく。いるのだ。彼女は。この部屋に。そして僕に何かを訴えかけている。

「探せということか

」

僕は重い手を引きずりながら、部屋を調べた。

良く見ればフローリングは濡れていた。僕の身体は確かに濡れていたが、僕の進んでいないところまで水滴が続いている。

その終点は壁だ。

白い壁に黒い物が付着している。

風呂に入る前には無かった黒点。それは入り口から見て右側にあった。

黒い点の色はくすんでいて、この色を僕は知っている。

手に巻いたタオルを見る。白の生地は深紅に染められている。

このタオルを放っておけば、この色になるのだろう。

僕は壁を叩いた。手に伝わるコンコンという音からして、コンクリートだろうか。

コンコン

思考を中断させたのはノックの音。扉からではない。壁からノックが返って来たのだ。

僕はもう一度ノックをする。

コンコン

やはり同じように返事が返って来た。

隣の部屋。そこには金髪のお兄さんが住んでいるはずだから、ノックが返ってきてても

おかしくは無い。しかし、今の状況ではそう言い切れるだろうか？

彼が隣の部屋に居て、ノックを返してくれていると。

ならば、なぜ、隣の部屋のベランダから光が洩れていない？ なぜ、彼は文句すら言いに来ない？

僕は壁に耳を当てた。

ザー……………

聞こえる。テレビのノイズが

「春野 瑛子さん……………？」

眩いた途端、背中に何かが触れた。

水、それにしては温かい

ペタペタ

何度も何度もそれは僕の背中に当たる。

繰り返されるたびに、背中が冷たくなっていく。

当たる液体はこも温かいというのに。

そして、僕は気付いた。

僕の背中に触れているのが何者かの手であることを。

そして、恐る恐る、その手を掴んだ。

振り向かず、慎重に

ズル

手首を掴むと、手は無抵抗に引き寄せられる。
嫌な感触と一緒に

まるで川底の藻に支配された石を触るような、ぬるりとした感触。
嫌悪感と恐怖が混じり合っているというのに、僕はその手を自分へと引き寄せた。

ズルズル　グチャ。

生肉を床に落としたような音だった。

横目に入っている床には血だまりが出来ている。
その中心には肉の塊があった。

血があったからこそ肉の塊だと分かった。
それがなければ、僕は赤いゴム手袋だと思っていたはずだ。
なんせ、その肉塊には五本の指が付いていたのだから。

悲鳴をあげそうになるが、僕の口は全く動かない。歯だけがガチガチと音を立てて動いている。

左手にはまだ何かを持っている感覚がある。明らかにさっきよりも細い、何かを

意を決し、引き寄せると、枝が見えた。白い枝。

五本に枝分かれし、中間部に綺麗な節が付いている。

こんな枝など存在するはず無い。これは骨だ
肉が剥がれ落ちた腕の骨だ

僕の背中に柔らかいものが当たる。
そうだ、腕を引き寄せたということは、僕の背中には身体があるの
だ。

鼻はその悪臭によって曲がった。

首筋はその細い髪の毛によってチクチクした。

耳はその吐息によって凍りついた。

目を瞑る事もできず、見ることもできず、僕はただただ耐えた。

「
て」

それは僕に何かを囁いている。

だが、声は小さすぎて聞こえない。

「
けて」

僕は全神経を耳に集中させた。

「
つけて」

聞くのだ。彼女の望みを。

「
みつけて」

聞こえた。

見つけて　それが彼女の望み。

じゃあ、何を？　どこで？　どうやって？

声をあげようとしても、口は動かない。喉はカラカラだ。

急に背中が軽くなった。

逃げ出すなら今しかなかった。

勇気を振り絞り、振り向く
そこには女性が立っていた。

全身はボロボロで酷い悪臭がする。

所々、骨が見える。腰なんてあんなに括れてしまって
怖い存在である彼女を見た時、僕は思ってしまった。

なんてかわいそうなのだ

彼女の顔。ほとんど骨になっている顔。けれどその表情は何を意味
しているか分かった。

彼女は泣いているのだ

「見つける 君を」

震えた声で僕は言った。

ドンッ

言葉を言った瞬間、僕の身体は後ろへと倒れた。
胸に受けた衝撃は彼女の腕によって生まれたもの。

僕の姿勢は後ろへと崩れて行く。

意識も。

変だな 後ろには壁があるはずなのに……
なんで、あたらない、んだろう、か

意識が完全に落ちてしまう前に、僕はもう一度彼女の姿を見た。
その表情はまるで

7日?目

ひどい頭痛がした。
吐き気もした。

起き上がった途端、胃から液体が逆流してきた。
吐いた。

ここが部屋のだ中とか、後片づけが大変だとか、考えもせずに思い
つきり。

胃の中の物をすべて吐き出した。喉の痛さで涙目だ。
そんな目は、僕にいつもと変わらない部屋を見せている。

ここは僕の部屋だ。いや
良く見れば、家具が違う。カーテンもこんな可愛いものを使ってい
ない。

テレビも薄型を買ったはずだ。
こんなブラウン管テレビではない。

ここは違う人の部屋。おそらく彼女のモノ。

いつの間にかテレビが付いていた。画面に映っていたのは砂嵐。

ザー………という音のみが部屋に響いている。

テレビの前には誰かが座っていた。

女性だ。

髪は長く、白いブラウスを着ている。

「春野 瑛子さん？」

「ええ」

僕は心底ほつとした。彼女は喋れるし、どこも欠けているようには見えないから。

「隣、いいかな？」

「いいわよ」

彼女の許可を得て、僕は隣に胡坐をかいた。

チラリと横を見たが、彼女の正面も人間と何の変わりも無いと思えた。

「ここって、キミの部屋？」

「ええ」

「ここで何をしているの？」

「テレビ」

「あっ、そっか」

僕には砂嵐にしか見えないが、彼女は何かを見ているらしい。

彼女に従い、僕も画面を見つめる。

しばらくして僕の目には何かが見えたような気がした。

映っているテレビの中に何か

食いつくように僕は画面を見た。

ザー……ザー……

「本当にいいのかい？　こんな所で？」

画面の中には女性がいた。心配そうな目で俺を見ている。いや、見ているのは画面の中の人物。おそらく瑛子さんをだ。

「うん。大丈夫だって」

「でもなあ、女の子はもつといい所に」

「でも、高いし、せつかく大学に通わせてもらっているんだから、少しは節約しないと」

彼女は中年の男性にそう言った。おそらく父親だろう。

「じゃあね」

「うん。お父さんもお母さんも元気だね」

明るい声で彼女は言った。

これは記憶だ。彼女の。時期はおそらく引っ越しの初日だ。部屋の中には段ボールが積みれ、如何にも新生活を始めるところだろう。

ザー……

ノイズが入り場面が変わった。

「えっと、スーパーはここで、ここが、電気屋かあ」

画面は左右にぶれる。キョロキョロしているのだろう。

この様子だと、彼女は随分と田舎から娘のようだ。

「そうそう。この頃は、すべてのモノが目新しく、ワクワクしてたっけ」

画面の外の彼女は呟いた。

彼女の気持ちは分かる。僕だって新生活が始まると思い、ワクワクした。

こんな事件が無ければ、自由を満喫していた。

ザー……

また場面が変わる。

どうやら夜のようにだ。

「君、可愛らしいね。うちの事務所でモデルしない？」

「えっ、モデルですか？」

「うん。絶対いけるよ。今から時間はある？」

「ええ」

ザー……

「お酒飲みなよ。ボクの奢りだからさ」

「はい……頂きます」

ザー……

「酔っちゃった？ それじゃあ、家まで送るよ」

「うっん……」

ザー……

「もしもし、俺だ。若い田舎者を手に入れたけど、お前も来るか？
ああ　じゃあ、××で」

ザー……

「きゃあ！　あなたたち、何をっ！　離して！」

「大人しくしやがれっ！」

「離してっ！」

「この糞女っ！」

「ぐ、ごぼお」

「くそがあ……………」

「や、止めるよ、死んじまう」

ザー……

「どうする？　おい……………」

「死んじまったのは仕方がないだろ……………」

「俺は捕まりたくねえぞ！」

「だ、大丈夫だ。ここに埋めれば」

「そんなこと出来る訳が」

「俺はこの物件のオーナーでもあるんだぜ。そしてお前は警官。で
きるな」

「あ、ああ……………」

ザー……

「まさか、自分の部屋の壁に埋まっているなんて思わないだろ。あ
とは適当にアリバイを作っておくだけだ」

「完璧だな」

「じゃあな、お譲さん。気持ち良かったぜ」

ザー、ザー、ザー……………

そこで完全に映像は終わった。それは彼女の記憶の終わりを意味するのだろう。

ザー……………

部屋の中には再びテレビの音だけになる。

静かだ　　とても。

「泣いて……………いるの?」

彼女に言われ、僕は自分の頬を伝う雫に気が付いた。
泣いていた。

「どうして、泣いているの?」

「どうして?　だって、キミがあんなに　　あんまりだ。　　こんなのはあんまりだっ!」

今まで出した事の無い声で僕は叫んだ。

喉が痛い。目の奥が熱い。

だが、どんなに叫んでも、喚いても、この気持ちを晴らすことはできないだろう。

「あなた……………優しい」

「そう?」

「ええ。とても」

彼女は立ちあがった。身長は僕よりも二周り小さい。しかし、顔つきはとても美人で　　こんな子が殺されたと思うと、僕の胸は更に痛んだ。

「あなたは、叶えてくれるの？　願いを？」

「願い」

「私を」

「君を」

僕は彼女の腕を掴んだ。

僕は叶えてやる。彼女の願いを

「名前を聞いていい？」

「藤森　晃」

「覚えておくわ」

彼女は僕の手を握った。やんわりとでは無く、痛いぐらいに。女性とは思えないほど力強く。

ザー……………

テレビの音が大きくなった。耳を塞ぎたい。だが、手は彼女が握っている。

ザー……………

「忘れないで。私の願いを」

「ああっ！」

僕の目の前にいる彼女は崩れていく。
ブラウスは赤く染まる。これは彼女の血だ
皮膚は破け、目は飛び出し、肉はドロドロに溶けていく
美しかった美貌も、声も、残らない。
残ったのは白い骨。

だが手だけは離さない。力強く、僕を握っている。
この強さは願いの強さ

「忘れない！ ぜったいに叶えてあげるからっ！」

ザー……………

7日目

鼓膜が切れたのか、テレビが切れたのか分からないが、いつの間にか音は止んでいた。

背中には冷たい固いものが当たっている。これは床だ。

平衡感覚が狂っていたらしい。立っていると思っていたのに実際は寝ていた。

さきほどのことが夢ではないかと思うほど、頭はボーっとしている。しかし、夢ではない。そう確信している。

「分かってるよ。必ず見つけるから」

部屋を見渡す。だが、目的の場所はここではない。

何となく分かるのだ。

僕は玄関を出た。

部屋が連なる壁。

105と103の間。

ここに彼女が居る。分かる

僕は壁を叩いた。

素手では痛いだけだ。何か機材を

周りを見渡すと、脚立が目に入った。鉄製で如何にも丈夫そうだが、躊躇せずに壁に叩きつける。

手に衝撃が走る。痛い。だが、気にしては居られない。

僕は助けるのだ　　！

数度脚立を振りまわし、壁にぶつけた。
壁にヒビが入っている。もう少しだ。

「何をしているっ！」

隣の部屋からお兄さんが飛び出してきた、僕を一喝した。
だが、そんなことに構っている暇は無い。

「止めないでください。僕にはやらなければいけないことがっ！」

喋りながらも、脚立を叩きつけた。

「おい！　気でも狂ったのかよ！　警察呼ぶぞ！」

「勝手にしてください」

僕は余程狂乱していたのか、お兄さんはただ茫然と眺めているだけだった。

だが、今度は周りの住人が騒ぎ出した。携帯電話を片手に持っているものもいる。

警察が呼ばれた　　時間がない。

僕は今まで以上に力を込め、壁を叩いた。

数十劇の末、壁の表面は破壊された。

何か見える　　ドアだ。

「まじかよ……………」

お兄さんは信じられないという様子で僕とドアを交互に見ている。彼の様子は面白かったが、僕に時間はない。ドアに手を掛け、一気に開けた。

途端に、大量の黒い塊が僕目掛けて飛んできた。

「ぎゃあああっ！」

ギャラリーから声上がる。そりゃそうだ。ゴキブリの大群が飛んできたのだから。だが、僕は気にも留めない。田舎にいけば、このぐらいの虫。いくらでもいるっ！

「誰か、ライトを」

「お、おう……」

お兄さんは近くの非常灯を取り、僕に渡した。僕を犯罪者か狂人だと思っていたギャラリーも静かになり、現れた部屋の様子に興味を抱いていた。

そこは部屋というより、一種の牢獄であった。壁に囲まれた一畳ほどのスペースにフローリングが敷いてある。

僕は映像を思い出した。

あの角度は男たちを下から見上げていた。ということは彼女は

「床を開けます。誰か、何か」

「ちよっと、待ってる！」

ただならぬ気配を感じてか、お兄さんも僕に協力をしてくれた。彼が持ってきたのはバールのようなものだ。

僕はそれを床に差し込みテコの原理で一気に押し上げる。

メリメリと腐食した床は裂け、変わりに中にある不自然な空洞が現れた。

そこにはボロボロになったシーツとそれに包まった何かがあった。

僕はしゃがみ込み、シーツを開いた。

「見つけたよ

」

僕はそつと彼女の亡骸の頭を撫でた。
自然と涙が出た。

371 目 目

「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時……………」

春休みも残り僅かというタイミングで僕は親戚の葬式に足を運んでいた。

親戚と言っても僕は彼のことを見たことも無ければ知りもしない。だから、身内には悪いが他人事の様に見える仕方が無かった。

スーツを着るのは大学の入学式以来だから、何とも落ち着かない。服装もそうだが、この空気は耐えがたい。

それでも僕の焼香の番が来れば、前の人の真似をし、死者を弔うふりをした。

写真の中のオジサンは疲れた顔で僕を見ている。

歳は僕の両親より上なのだろうか？

興味本位で棺を覗いてみたが、顔が白い布に覆われていた。

祖母の葬式では、たしか顔を見れたと思ったのだが、これは宗派か何かの違いなのだろうか？

窮屈な葬儀が終わり、その後は親戚会である。

親戚同士ということで当然、顔見知りのおじさんやおばさん。従姉妹たちがいる。

だが、僕と同じぐらいの歳の子はいないので、僕は両親と共に席についていた。

酒が入ると会場は騒がしくなる。先ほどまで冷え切っていた空気が180度変わり、ここはとても陽気で温かい。死者の弔いなど忘れ、彼らは楽しそうに昔話に華を咲かせる。

酒を進められたが、僕は殆ど飲まなかった。

チューハイなどは飲むが、ビールを飲む習慣はない。

それなのに親戚の中には僕に無理やり酒を進めてくる人もいるのだから困る。

僕はまだ20になっていないというのに……

会が始まって一時間。料理も殆ど無くなった頃、父が珍しく自分から僕に話しかけてきた。

「なあ、晃。そろそろ、話してくれないか」

「なにを？」

「あの話だよ　ほら、一年前の」

「ああ」

いつもは大人しい父なのに今日は酒が入っているせいか、積極的だ。僕は少し迷ったが、話すことにした。酒の席だし、もしかしたら冗談と思われるかもしれないが。

春野　瑛子さんを見つけてから、しばらくの間、僕は大変な苦勞をした。

まず厄介だったのは警察の事情聴取。

彼らは、なぜ死体を見つけたのかとしつこく質問してきた。

面倒臭くなりありのままの話したが、彼らは信じてくれなかった。

そればかりか、僕が犯人と繋がりがあるのではないかと疑われる場

面もあった。

馬鹿みたいだろう？ 24年も前の事件だというのに。

結局、マスコミ向けには壁に血液が染み出してきた、とか、異臭がするとかで隣の隣人が

気が付き110番したと発表された。

手柄を横取りされたようで少し悔しいが、実名などは出されなかったし、僕の生活に支障が出なかったのだし、結果オーライだ。

それに、嬉しかった事がある。

僕は春野さんの葬式に呼ばれた。彼女の両親は皺だらけの顔をクシヤクシヤにして僕に何度も感謝を述べた。

泣き顔の後の笑顔は忘れられない。

仏壇の彼女は笑っていた。

僕は彼女の願いを叶えてやった。それにどんな意味があるかは分からない。

けれど、彼女自身、両親、少なからず3人を笑顔にすることができた。

これだけでも無茶をした甲斐があった。

脚立を振りまわし過ぎて、骨折したなど恥ずかしい思い出ができてしまったけど。

彼女は再び、僕の前に姿を現す事もなく、アパートでは平穏な時間が過ぎていく。

僕は父に話した。ありのままを。
父は大人しく聞いてくれたが、表情はどこか険しかった。

「なあ、春野さんは、それで救われたと思うか？」
「えっ？」

「殺され、埋められ、やっと外に出してもらった。確かにお前は彼女の願いを叶えた。じゃあ次は彼女は何を望む？」

「天国に行くこと……かな？」

そんなことを考えた事はなかった。彼女は解放され、俗に言う成仏をしたと思っていた。

「晃は優しいな。俺なら復讐を考えるが」

僕は思い出した。テレビの中に映った映像を。
今でもあの光景は目に焼き付いている。
彼女の味わった屈辱、痛み、憎しみ
確かに、晴れる訳はないだろう。

「まあ、怨霊が存在するなら、復讐されているかもな。犯人は」
「そうかもね……………」

トイレが近くなり、僕は会場を出た。トイレに行くには葬儀場を通らなければいけない。
そこである会話を耳にしてしまった。

話し手はオジサンの妻と子どもらしい。

「結局死因は何だったんだろうな？」

「自殺ということになってるけど……………」

「親父は最近病んでいたのか？」

「確かに、警察を退職して、家で暇をすることが多くなったけど

」

「そうだよな。あの親父が自殺なんて」

「違うの、聞いて」

夫人の声はとても震えていた。表情も何かを恐れているようだった。

「自殺という事になっているけど、おかしいの」

「なにが？」

「何かに殺されたのよ」

「はあ？」

「分からないわ。わからない……………私があの人から目を離れたのは、ほんの数分」

「ああ、聞いたよ」

「けどあの人が発見されたお風呂場には施錠もされていて、密室だったのよ」

「だから、自殺なんだろ？」

「じゃあ、自殺でどうしてあんなひどい事になっているの？ 心臓がないのよ！」

「お袋、落ち着けて。声がでかいよ」

僕は背筋がゾクリとするのを感じた。

彼らの立ち話を聞いただけであるのに、何か分かった気がするのだ。

警察、不可能な自殺、遺影に映る顔

「俺なら復讐を考えるが」

先ほどの父の言葉が浮かんだ。

そうか。彼女は

思考の間に、僕の後ろから足跡が聞こえてくる。
立ち聞きしていたとばれるのは気まずい。
僕は何気ない顔をし、トイレへと向かった。

鏡を見ながら息を整える。

僕は随分、怯えているらしい。顔の血色が明らかに悪くなっている。
僕は水道の水を手で救い、顔を洗った。

どうして怯えているのか自問自答をする。

そうだ。僕が彼女　春野　瑛子を解放したから人が死んだのだ。
いや……そんなこと以上に、自分の親戚が彼女を殺したという事実
の方がショックであった。

やるせない気持ちを抱えながら、僕はトレイから出た。

葬儀場にはあの夫人も息子もいなかった。

変わりに誰かが椅子に座っている。ずいぶん髪の長い人だ。
彼女は俯き、肩を震わせている。

泣いているのだろうか？ いや

「くくくくくく」

小さく洩れる声は嗚咽ではない。

彼女は笑っているのだ
何が可笑しい？ 死んだ人の前で。
なぜ、彼女は

僕はそつと彼女に近づいた。

「晃さん。いらしてたの」
「えっ？」

僕は困惑した。彼女は振り返りもせず僕が誰だか当てた。
それに僕の名前を知っているという事は、彼女は僕のことを知っている。

「あなたは」
「お久しぶり」
「あ」

僕は絶句した。

そこには彼女が居た。春野 瑛子が。

「幽霊でも見たような顔ね？」
「あ、ああ……………」

彼女は笑う。美しい笑顔だというのに、僕は微笑み返せなかった。
その上機嫌の仮面の下には考えられないほどの狂気が渦巻いている。

「僕を 殺すのか？」
「なんで？」

「僕はこの人と血のつながりがある……………」
「まさか、私がここに来たのは貴方に感謝をしたくて」

「そうだ。貴方にこれを　あげる。あいつの大事なだいな、だいな」

彼女は自分の腐りきった胸元に枝のような手を突っ込み、小さな小箱を取り出した。

ドロドロに囲まれた赤い箱からは、酷い悪臭がした。

「お礼　　私はいかなきゃ。ころすの。ころすの。ころすの。ころすの。ころすの。ころすの。ころすの。ころすの。」

そこで僕は気を失った。

起きた時には葬儀場の床に倒れていた。

夢だと思ったかった。

しかし、僕の手には先ほどの赤い小箱が握られていた。

中身は見えない。わざわざ見たくはないから

444目

「かあさん。そんなに心配しないで、ちゃんと食ってるって。ああ。彼女ともうまくやってる」

月一回かかってくる母の電話に対応しながら、僕は部屋の片づけをしていた。

一年以上も住んだ部屋は物置化して、客を呼ぶ度にこうやって大掃除をしなければならぬのだ。

「あ。そろそろ、友達がくるわ。じゃあね」

半ば強制的に電話を切り、僕は掃除に専念する。

母には友達といったが今日来るのは、彼女だ。そりゃ、掃除にも気合いが入る。

掃除の途中、棚から何かが落ちた。

それは赤い小箱だった。

嫌な思い出だが、捨てるにも捨てられず部屋に置いていた。

あれからこの箱を開けてはいない。おそらく一生開けないだろう。

小箱を棚に置き、掃除を再開する。

作業は捗り、すぐに掃除は終わった。

ピンポン

チャイムが鳴った。時間より少し早い彼女だろう。

早足で、玄関に寄った途端、携帯電話が鳴った。

この着信メロディーは彼女だ。

僕は携帯を取って、通話ボタンを押した。

内容は玄関先に居るから開けてというところだろう。

「あ 晃君？ ごめん。電車乗り遅れちゃって、少し遅れるかも」

「えっ？」

彼女の話の内容に僕は疑問を感じた。

「今どこ？」

「 駅。 あっ、今電車来た」

受話器からはしっかりと電車のアナウンスが聞こえる。

彼女は嘘などついていない。

じゃあ、玄関先にいるのは誰なのだろうか

僕は通話を切り、覗き穴から外を覗いた。

「 っ！」

心臓が飛び出しそうになり口に手を当てる。

玄関の先には目があった。

虹彩がはっきりと見えるほど近くに。

「 晃。 いるんだろ？ オジサンだよ」

玄関先からは不気味な声が聞こえた。

男性の低い声が一段と不気味さを醸し出している。

「晃。返してくれよ？　それがないと俺は　　」
「ほほほ」

嫌な音がした。ポタポタとペンキを床に零すような鈍い音。

「あきら　あきら　あきら　」

ノブが回る。

ガチャガチャガチャ

僕は怖くなって、布団を被った。何が起きているのか理解できない。僕に何を求めているのだ？
分からない。分からない

急に音がしなくなった。気配もなくなった。
僕は布団から顔を出し、部屋の中を見た。

何もいない
奴は消えたのだ。

ゾクリ

この感覚は久しぶりだった。

だから思わず僕は振り向いてしまった。
そこには

「あきらあ、かえしてくれよお　　」

死体がいた。全身から血を流し、胸がぱっくりと割れている。
僕は分かった。彼は死んだはずのオジサンだと

彼の手が伸ばされた
僕に

「みいつけた……………」

僕は失神した。

目を開けて、部屋の隅々を探したが、あの化け物はいなかった。

その日を境に僕の周りでは怪奇現象は起こっていない。

だが不思議な事に、あの赤い小箱を見つけたことは出来なかった。

あの箱の中身は多分、彼の心臓だったのだろう。

ともかく、僕は短い間に色々なことを経験した。

この体験で学んだことは、下調べもしないで安い物件に手を出すのは危険だということ。

生者でも死者でも人の恨みを買うと恐ろしいということ。

この2つだ。

あと、覚えておくの良い。悪事を働けばそれが自分に返ってくるというこを。

444日目（後書き）

思い付きで書いたホラー作品なので、深くも面白くも怖くもないと思います。後悔はしていません。

むしろ、いつもとは違う感覚で楽しみながら書いて、いいリフレッシュになりました。

ご感想などありましたら、お気軽にお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503v/>

1Room

2011年9月28日21時49分発行